

# 身体的機能に基づく段階的思考支援型 食事援助技術教材の開発と内容検討

Development and Content Review of Stepwise Thinking Support-Based Meal Assistance  
Technology Materials Based on Physical Function

磯濱 真理子\*<sup>1</sup> 川越 明日香\*<sup>2</sup> 中野 裕司\*<sup>2</sup> 戸田 真志\*<sup>2</sup>  
Mariko ISOHAMA\*<sup>1</sup> Asuka KAWAGOE\*<sup>2</sup> Hiroshi NAKANO\*<sup>2</sup> Masashi TODA\*<sup>2</sup>

周南公立大学\*<sup>1</sup> 熊本大学\*<sup>2</sup>

Shunan University\*<sup>1</sup>  
Kumamoto University\*<sup>2</sup>

<あらまし> 本研究の目的は、身体的機能の視点に基づき、情報の整理・判断・再考といった思考過程を段階的に学習できる食事援助技術教材を開発し、その設計の妥当性を検討することである。本教材は、ガニユの9教授事象に基づき構成し、看護記録を用いて思考過程の言語化・外化と変化の可視化を支援する。教材の設計および内容の妥当性について、専門家レビューを通して検討した。

<キーワード> 身体的機能, 段階的思考, 食事援助技術, 看護学生, 可視化

## 1. はじめに

近年、看護基礎教育では、医療安全を含む医療提供体制の変化や医療環境の複雑化に対応できる看護実践力の育成が求められており、学生がどのように考え、判断するのかといった思考過程の教育が重要視されている。看護学教育モデル・コアカリキュラム（文部科学省 2025）においても、思考過程を重視したコンピテンシー基盤型教育が示されている。このような学習支援には、鈴木（2019）が示す教育活動の効果・効率・魅力を高めるインストラクショナル・デザインに基づく体系的設計が有効であり、秋山ほか（2021）のICTを活用した看護技術教育においても、学生の思考深化や主体的学習を促す学習効果が報告されている。一方、食事援助技術は、臨地実習での実践機会が限られ、手順中心の理解にとどまりやすいという課題がある。従来の教材は、判断結果の提示が中心であり、学習者の思考過程やその変化を捉えにくい。本研究では、思考そのものを教材化し、思考過程の変化を比較可能にした教材を開発し、その設計の妥当性を専門家レビューにより検討する。

### 1.1. 目的

本研究の目的は、身体的機能の視点に基づく段階的思考を可視化する食事援助技術教材を開発し、SME（Subject Matter Expert）およびIDer（インストラクショナルデザイナー）によるレビューを通して、本教材が看護学生

の観察における思考過程を言語化によって外化し、その変化を捉えることを可能にする設計となっているかを検討することである。

### 1.2. 学習目標

- (1) 食行動に関連する情報を学習素材として提示された看護記録から抽出・分類できる。
- (2) 7つの身体的機能の視点に基づいて初期優先度を判断できる。
- (3) 初期に判断した優先度の内容を修正し、再度優先度を決定できる。
- (4) 自身の判断に至る思考過程を振り返り、迷いや理解不足を言語化できる。

## 2. 教材の設計

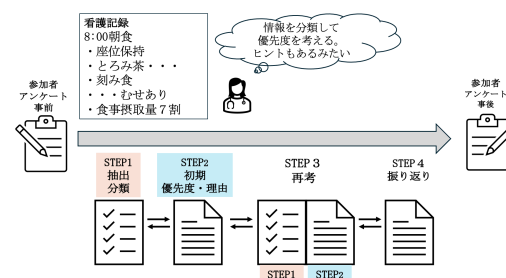


図1 教材の全体像

本教材は、看護学生が食事援助場面で、患者の状態を判断するための思考過程を段階的にステップ構造で学習することを目的とした。特に、食事援助における判断の基盤となる身体的機能の視点に基づき、Step1:情報を抽出・

分類, Step2:情報の優先度を判断・決定する, に至るまでの思考の流れを意味づけるために, ステップの途中で Step3:再度, 判断・決定を繰り返す. その後, 思考の流れを Step4:振り返る(図1). Step1に対するヒント(例示)を以下に示す(表1).

表1 Step1: 7つの身体的機能の視点

7つの身体的機能の視点	カルテ情報	考えるヒント(例示)
脳機能(感覚情報、認識、判断、運動)		ヒント① 食事場面で呼びかけに反応するか。食べ物を認識しているか。
体幹保持機能(姿勢)		ヒント② 椅子に座る際、前傾姿勢、後傾姿勢、左右への傾きがないか。
上肢運動機能(つまむ、すくう、左右別々の動き)		ヒント③ スプーンを持つ(持ち替える)、すくう動きがスムーズであるか。
口腔機能(食塊形成、食物移送)		ヒント④ 口腔内に食物を安全に保持できるか。口からこぼれないか。
咀嚼機能(かむ、食塊形成)		ヒント⑤ 咀嚼できるか。食塊の形成はどうか。
嚥下機能(嚥下反射)		ヒント⑥ ごくくと飲み込む音があるか。飲水でむせるか。
気道防御機能(喉頭反射)		ヒント⑦ 食事中の咳、むせなどがあるか。

### 3. 評価

本教材は、看護記録から得られる食行動に関する情報を基に、段階的に思考を進める構成とした。看護記録には食事以外の日常生活活動に関する情報も含まれるが、身体的機能の視点を用いることで、食事援助に必要な判断へと結び付け、思考過程を支援する。本教材では、初期優先度判断と再考後の優先度判断の変化を捉えることを目的とし、判断段階を二つに分けて整理した。最終ステップに振り返りを配置することで、学習者の思考の変化を可視化しやすい構成とした。

#### 3.1. IDer レビュー

教材について IDer によるレビューを実施し、情報提示の明確さや認知負荷の適正さ、学習者の思考や行動を支援する構成となっているかを検討した。あわせて、各ステップの理論的妥当性と学習内容との整合性を確認し、改善点を明らかにした。

#### 3.2. SME レビュー

教材内容の専門的妥当性と実用性を担保するため、SMEによるレビューを実施した。食事援助場面で抽出すべき情報や身体的機能の視点、観察項目の優先度が臨床判断や指導に適しているかを確認し、学習内容との整合性や誤解を招く表現、不足点を明らかにした。

### 4. 考察

IDerによる専門家レビューから、本教材は情報提示の明確さや学習支援性の観点で妥当性を有すると評価された。情報の構造化や段

階的例示は、学習者の状況理解を支援し、思考の整理に寄与する。一方、複数の視点を扱う構成は学習初期には認知負荷が高くなる可能性があるため、具体例の補足が有効とされた。本教材は正解提示ではなく思考過程の可視化を重視し、振り返りを含むステップ構造により、主体的な思考過程を支援する設計となっている。

SMEによるレビューを通して、臨床場面を想定した看護技術教育として概ね妥当であると評価された。看護記録を基盤に患者状態を観察・判断する構成は臨床的思考を促進する点で有効であり、7つの身体的機能の視点も汎用性のある観察枠組みとして評価された。しかし、より正確で安全性に配慮した判断を促すためには、観察項目の優先度を安全性の観点から明示し、看護記録以外の情報にも注意を向けさせる工夫が必要であると指摘された。実患者への直接的介入を伴わずに思考過程を段階的に整理・訓練できる点は、安全性を意識した判断の基盤形成に資する教材としての教育的意義を示している。

### 5. 今後の課題

本研究では、思考過程の外化を意図した食事援助技術教材を開発し、専門家レビューにより設計と内容の妥当性を検討した。一方で、学習者の実践能力そのものは評価をしていない。今後は、本教材の使用によって学習者の思考過程や優先度判断がどのように変化するかを分析し、実践能力との関連を検討する必要がある。さらに、学内での学習・演習で得た思考枠組みを臨地実習での判断・行動へどのように接続させるか、教育設計の観点から検討することが課題である。

### 参考文献

- 秋山雅代, 服部容子, 新関幸子, 横山聖美, 前田朝子ほか(2021) ICT を取り入れた反転授業のデザインに基づく看護技術教育の学習効果と課題. 天使大学紀要, 22(1):29-40.
- 鈴木克明(2019) インストラクショナルデザインー学びの「効果・効率・魅力」の向上を目指した技法一. 電子情報通信学会通信ソサイエティマガジン, 13(2):110-116.
- 文部科学省(2025) 看護学教育モデル・コアカリキュラム令和6年度改訂版.